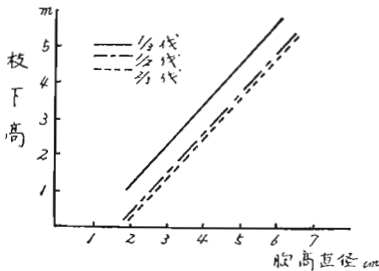


し。一般的傾向として、春伐、夏伐の場合は、伐採率が増加するにつれて、実材積合計も増加し、秋伐の場合は、逆に減少することが認められた。このことは、新竹本数および胸高直径との関係からみて、当然といえよう、

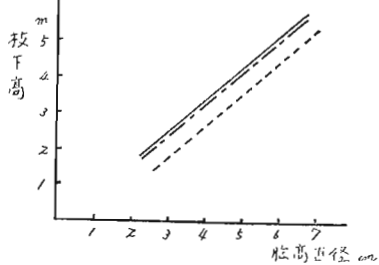
vii 新竹の枝下高

胸高直径と枝下高との回帰式より、作業法別の枝下高を比較した結果は、第1図～第3図のとおりである。

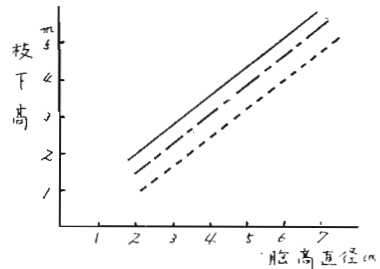
第1図 春伐の場合



第2図 夏伐の場合



第3図 秋伐の場合



春伐の場合は、1/2伐区が最も枝下高は高く、3/4伐区と5/6伐区の間には差はみられない。夏伐の場合は、1/2伐区と3/4伐区の間には差はみられず、この両者は5/6伐区に比べ、枝下高は著しく高い。秋伐の場合は、1/2伐、3/4伐、5/6伐、の順に枝下高は低くなっている。

以上の結果から、新竹の枝下高は、伐採率が高くなるにしたがって低くなるものと判断される。

1) 青木尊重他, 竹林の合理的施業に関する研究第1報 日林会九州支部大会講演集 1960年

17. 椎茸生産に関する諸問題

其 1 現 状

九大農学部 青木尊重・柿原道喜・吉良今朝芳

1. 農家経済にしめる椎茸の位置

椎茸生産は、気候温暖な適度の湿度を有し、原木の豊富なことが基本条件とされている。

九州地方は栽培上好適の環境にあるためか、農山村では古くから木炭に次ぐ有利な副業として生産が続けられ、不断の研究と努力の結果、今日では質的には最高位を占め、量的にも全国生産高の大半をしめるまでの発展をみている。

従来の農業は米麦偏重であつたが、最近では水稻の早期栽培、てん菜、酪農を中心に兩期的な姿貌をなさんとしているし、また米麦とともに農家経済に大きな比重をしめていた特産物としての木炭・青表・まゆなど

が斜陽化し、代つてみかんその他の果菜類が伸びてくるなどの変化がおこっている。しかし椎茸は、依然として王座の位置にあり、ますます増産に拍車がかけられている。

その生産額については、大分県の場合を例にとると年間約15億円以上と推定されており、これを農業の主流である米代金の約50億円や麦代金の約7億円と比べてときに椎茸の生産額は米の $\frac{1}{3}$ 、麦の2倍となり、農家経済にしめる位置は高いものがあるといえる。

ここ数年前までは、大分、宮崎、熊本などの九州を主体とする僅か数県で生産されていた椎茸も、種駒の改良によつて、いまではとくに気候条件の不良な地域

を除いては、どこでも容易に栽培ができるようになったことと、最近では生産者団体と種駒メーカーが協力して生産の奨励を押し進めていること、加えて近時木炭の販売が不振なために、椎茸の生産へと転換するものが続出していることなどからして全国的に増産の気運にあるといえる。

このことは椎茸が、農家の副業から独立して生産業への前進をしめしているものとも、かつての特産地が主産地へと変つているものともみうけられる現状にある。

後進地域が、九州地方の生産量と技術水準にまで到達するには、なお相当の日時を要するものと思われるが、九州地方は椎茸の本場などと安心してはいられない現状にある。

2. 椎茸の生産状況

春子は「自然子」、秋子は「しけ子」といわれていることから推察できるように、生産は春に重点がおかれ、秋は台風襲来による降雨を利用して作る台風待ちの生産であり、生産比率は春子85%、秋子15%とみられている。

椎茸相場の変動の激しさは、生産の安定性がないのが最大の原因として指摘されているが、生産を人為的に不安定にしている要因に、この台風待ちの秋子生産があげられる。期待どおりに、丁度都合よく来るか来ないかわからない台風をあてにして生産することは、それだけでも商社、商人の投機心を誘い、思惑の食指を動かすのに十分な要素がある。生産の安定化と流通の合理化をはかるには、秋子の本格的生産に努めるとともに、春子と秋子の生産割合を調整することが必要であろう。

3. 椎茸の需給状況

椎茸の需要は、内需と外需に大別され、内需は番信であり、外需は冬茹である。

椎茸は、本来価格の変動しやすい商品であるが、近

年は不作続きのため、内外ともに大きな相場の騰落もなく、需給関係は比較的円滑に推移している。

不作による品薄で、需給関係が均衡を保持しているということは、椎茸は目下全国的に増産体制にあり、もし豊作ともなれば生産過剰となり、販売に困るような事態がおこらないとも限らず、幾他の疑問と不安がある。

生産のテンポにあわせて消費が伸び、需要が増加するか否かは、国内の景気や食品構造の変化、海外市場の動向とくに安い中国産椎茸の持直しによる香港市場への進出、貿易の自由化による韓国産や中国産の椎茸の輸入などと密接な関係があり、簡単に見通しをつけることは困難である。

したがって消費の宣伝に力を入れるとともに、生産費の引下げと流通の合理化をはかることによつて、大衆価格の実現がみられるならば、さして心配はあるまいと予測されている。

椎茸は非常に栄養価の高い美味しい食品であるにもかかわらず、一般に手産に親しまれていないのは、味付のりや卵に比べて料理法が簡便即席性に欠ける点もあるが、最も大きな原因は価格が高いことにあるといえよう。

したがって椎茸の消費増大を阻んでいるのは価格高であり、消費の伸張をはかるには「価格を安くすることにある」といえよう。

この価格引下げ問題は、国内消費だけに限らず、その販売において依存度の高い海外市場についてもいえることである。

椎茸の輸出伸張には、品質の優秀性と適正価格の維持が要求されることは当然であり、そのためには生産費の引下げと弱小商社による多口的輸出形態を改善し、窓口の集約化をはかることも必要ではなからうか。

18. 椎茸生産に関する諸問題

其2 問題の提起

九大農学部 青木尊重・柿原道喜・吉良今朝芳

1. 原木問題

原木資源の確保は、生産量の維持や農家経済の安定化の上から、極めて重要な問題である。

原木資源の枯渇は、第1にパルプ用材、杭木用材および椎茸原木用材としての使用量の増大と、第2に広葉樹から針葉樹への急速な林種転換が進展しているこ

とに原因があるとされている。そのため原木資源の不足は漸く深刻化し、今後の成行きが憂慮されてきている。このような原木入手の困難化は、原木単価の昂騰を招いているようであるが、このことは椎茸の商品化拡大のための生産費の引下げという命題に背反する現象といえよう。